ご近所で便利なミニチュア富士

千里を一望、展望塔の時代到来

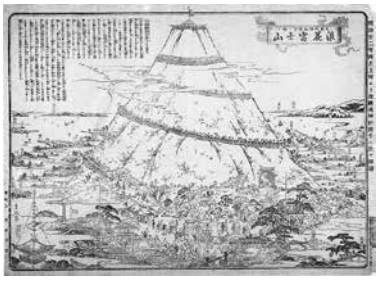
富士山がニュースを賑わせている。訪日客のコンビニ前での撮影や軽装登山が問題となったり、環境保全の入山制限や入山料がとりあげられる。富士山を望む富士見通りの景観問題で、完成したばかりのマンションの解体が決まったことも話題となった。

とは言うものの、日本人が富士山を愛していることに違いはない。私も中学の学校行事の登山で御来光を拝み、帰り道の「砂走り」を駆けおりた達成感が忘れられず、新幹線から富士山が見えるとハッピーになる。近江富士（滋賀県・三上山）、讃岐富士（香川県・飯野山）など、旅先で各地の富士を見てもうれしい。大阪近郊では有馬富士（三田市）が名前からして富士山である。

古くから富士山には山岳信仰があり、江戸時代には、手近に登山、参詣できる富士山のミニチュアとして「富士塚」というものが神社や寺の境内に作られた。本物の富士山の土や溶岩も運ばれ、それを登れば誰でも富士山に登ったことになったのである。安永8（1779）年、高田馬場（現・東京都）に作られた「高田富士」が最初とされ、富士塚の高さは2mから12mのものまである。昭和初期にも作られ、東京都内だけで39基が現存するという。

大阪でも明治22（1889）年、生国魂神社（天王寺区）の南側に「浪花富士」（表紙写真）が出現した。船本茂兵衛「「浪花富士」物語」（「上方」第18号、1932年）によると、生国魂神社周辺は、もともと庶民の行楽地でもあり、その賑わいを当て込んで富士山を模して円錐形に木材を組み、漆喰で塗り固めた「浪花富士」が開設された。高さは18mで、上町台地にあったので眺望はよかったはずだ。

大阪のミニチュア富士は、堂々たる山容を描いた木版の案内図が制作されたが、写真ではデコレーションケーキみたいな形のいささかチープな仮設建築に見える。富士塚のような土を固めたものではなく木造のこともあり、開業した年の登山者が2万人もあって早くに傷んだに違いない。開業1年足らずで閉鎖となった。



当時の「浪花富士山」案内図。写真と比べて堂々とした富士山に描かれている。

ただ見逃せないのは、この時期にいくつもの展望塔が大阪に出現していることである。

「浪花富士」の前年の明治21（1888）年、“ミナミの五階”の愛称で呼ばれた高さ31mの「眺望閣」が現在の浪速区に建設されている。位置的に「浪花富士」と“ミナミの五階”は、現在の黒門市場付近を挟んでにらみ合っていたはずである。互いの展望台から手をふりあうこともあっただろう。

「浪花富士」と同じ翌明治22年には、現在の北区茶屋町に高さ39mの“キタの九階”こと「凌雲閣」が建設された。明治36（1903）年には、天王寺公園で開かれた第五回内国勧業博覧会に高さ45mある大林組の「大林高塔」が建ち、明治45（1912）年、新世界に高さ約75mの初代通天閣が誕生する。

「浪花富士」が再興されなかったのは、維持費の問題のみならず、大阪庶民には富士信仰よりも高いところから街を見下ろしたいという願望が強く、“ミナミ”と“キタ”の展望塔の誕生でそれが満たされたためかもしれない。

楽天地の最上階にあった展望台「登仙閣」

また「浪花富士」の螺旋状に設けられた階段は、大正3（1914）年に千日前に開設される劇場「楽天地」の展望台である「登仙閣」（本頁写真）も連想させ、信仰よりも遊園地的な気分が濃厚にただよう。

私も高い所が好きで、中学時代の富士登山で使った金剛杖を物入れから出すたびに、もう一度、御来光を拝みたい気もちになるが、体力が心配だ。現代版の「浪花富士」があれば、ズボラをかましてそれで済ましてしまうかもしれない。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。